慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	最終講義「理工学部でドイツ語を」
Sub Title	Deutsch in der technischen Fakultät
Author	大谷, 弘道(Otani, Kodo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.49 (2012.) ,p.259- 271
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大谷弘道教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kodo OTANI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20120330-0259

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最終講義「理工学部でドイツ語を」

大　谷　弘　道

「理工学部でドイツ語を」という，わけのわからない題でお話をいたします。通常，この最終講義では，自分のたどってきた道をお話しする，自己紹介の場になることが多いようです。私も恥ずかしながら，そのために時間を使わせていただきます。

じつは私はまだ定年の年になっていません。来月末に 65 歳になります。65 歳になった途端に定年退職です。ドイツ人に話せば「お前は得をしたな」ということになるかもしれません。働く期間が少なければ少ないほどハッピーということでしょうから。

私が親しくしていました同僚で何人かの方はこの年齢に達することなく，つまり定年を迎えることなく他界しています。ここまで来ることができたことを私は，大変ラッキーなことだと思っています。当たり前のことと思っていません。

なぜドイツ語を？

さて，人のたどる道は，偶然に影響されることが多くあります。

私にとっての大きな偶然は，3 つあります。ひとつは慶應義塾で学んだことです。2 つ目は偶然にドイツ語を専攻したことです。そして 3 つ目の偶然は理工学部に，当時は工学部でしたが，そこに職を得たことであります。

慶應義塾は，私は小さいときからあこがれていた学校でした。理由はわかりません。ラジオでよく野球の早慶戦を聞いて，慶應義塾を応援しました。慶應義塾を格好良い学校だと感じました。スポーツの試合でよくあっさりと負けます。それも魅力でした。

私は兄弟が多く，みんなおしゃべりで，家で私が話す必要は全くありませんでした。幼稚園時代にあまりにもしゃべらないので，知恵おくれではないかと親に心配され，専門の医者に連れて行かれたことはよく覚えています。小学校時代に私のほかにもう一人しゃべらない子供がいました。この子は小学校を出ると慶應義塾に進みました。たしか普通部だと思います。しゃべらなくても入れてくれる学校なんだ，とあこがれを持ちました。

ただ私の場合は「しゃべらない」ではなく，「しゃべれない」という状態でした。どうしたらしゃべることができるのか，これが最初の私の疑問で，課題でもありました。良くしゃべる連中がいます。私は彼らをいつもじっと観察してまねをしようとしましたが，全く成功しませんでした。そうした理由から，しゃべること，言葉に関心を持つようになったと思います。

あとで気がついたのですが，ドイツにはしゃべるための手引書があります。日本には手紙の書き方とかはありますが，しゃべり方の手引書を見つけることはできません。しゃべるときの導入の仕方，そして展開，終わり方が，具体的なドイツ語表現を添えて何種類も紹介されています。どんな表現で会話のプロセスが展開されるか，会話の構造がよくわかり，その通りに話すと，確かに話がスムーズに進むので，大いに活用させてもらいました。これらは会話分析という学問の裏付けによるものだと思います。

一度学生から，自分はドイツ語の会話を始めることはできるのだが，どうやったら終わらせることができるのかがわからないと，質問されたことがあります。たしかに，会話を終えるときに「私はここで会話を終えます」とは言いません。日本語では会話を終えたいときに，なんとなく腕時計を見たりして，雰囲気で知らせることがあります。ドイツ人の場合，基

本的に言葉で表現します。

さて，「なぜあなたはドイツ語を専攻したのですか」という質問をよく受けます。これはドイツ人からもされます。じつはこれがわからない。先ほど「偶然にも」と言いましたが，全くの偶然としか言いようがありません。ドイツ人との結びつきは全くありません。

ただ，高校時代に本を通してドナルド・キーンという人を知りました。この方は最近日本人になりましたが，もともとはアメリカの方です。当時確か日本文学史のようなものを読んだと思います。キーンさんは日本文学をまったく新しい視点から紹介し，論じていました。これに驚きました。私たち日本人が見ない部分を見ていることにびっくりしました。たとえば「日本には伝記らしい伝記が少ない」と言ったりします。日本では伝記よりも自叙伝が発達したようだ。こんな風に日本文化の特徴を描き出します。

キーンさんの場合は，単に欧米文学の視点だけでなく，中国文学の視点からも日本文学を眺めていたと思います。人と異なる視点を持てるということ。これにあこがれました。今から考えると，いわば教養教育の目的みたいなものに対する憧れかもしれません。

言葉に対する興味と同時に，外国語を学びたい，日本人とは違う視点を得たい。それがたまたまドイツ語だったということだと思います。

ドイツ人は対談をしない？

キーンさんほどではありませんが，私もドイツ語を勉強していて，気がついたことがあります。ドイツには，二人の人が向かい合って話をする「対談」というジャンルが見当たりません。じつは私はこの「対談」が大好きです。お互いの知見を補いながら，二人の人がそれぞれの見方でテーマを深めてゆく。文学者に限らず，日本ではいろんな人がよく対談をします。会話ですから，とてもわかりやすい。言葉が平易で，それでいて内容が豊かです。外国語の勉強が，この「対談」を材料にしてできないものか，そう思い，ドイツに行ったときに探しました。ところがこれが見つかりま

せん。書店を回って，書店の店員さんに相談しました。ドイツでは書店の店員さんは，本のタイトルだけでなく内容もかなり詳しく知っていることが多く，相談に乗ってくれます。彼らに「対談」というものを説明しますと，しばらくじっと考えていて，「そういうものは存在しません」と答えます。「そんな馬鹿な」と思いました。しばらく自分なりに探していますと，数は少ないですが，ないことはない。じつはあります。ところがそれが日本の対談とちょっと違います。これを対談と言ってよいものかどうかあやしいところがある。ドイツ語で Gespräch と呼んで，辞書には「対談」と訳語が出ています。

私の研究室にたまたまあった対談をちょっと参考にします。小澤征爾と大江健三郎との対談です。この二人がどういう表現で話をつなげてゆくかをちょっと見てみます。こんな感じです。「そうでしょうね。当然そうですね」「ええ，なるほどね」「わかる。うん」「僕も心からそう思います」。こんな風に私どもにとっては馴染みのある展開をします。いわゆる「同調する発話」の連続です。これが日本人の「対談」です。一方ドイツの場合ですが，著名な文芸評論家 Reich-Ranicki と音楽評論家 Joachim Kaiser の Gespräch いわゆる「対談」が手元にありました。この二人は相手の発言を受けて次のように言葉を続けます。「そうですかね」「それは場合によりますね」「そう簡単には言えません」「その点では全く同意見です。ただし制限があります」「この点がわれわれの相違点ですね」。こんな風になります。話しかたの構造というか，二人のかかわり方がまったく違います。二人が同じ方向を向いて同調するのではなく，二人が正面から向き合っています。こうした会話を二人だけでする，これはよほど幅のある人同士でないと難しいと思います。したがってドイツでは対談が少ない，そう思いました。それよりも楽に自分の意見を言える「インタビュー」という形がドイツでは広く行われています。あるいは複数の人が参加し，司会者を立てて行う「討論」，これですと，対談よりもっとうまく話が進むようです。家庭での会話はさすがにこれとは違う，長いこと，私はそう考えていまし

た。ふだん親しい人と「私はあなたと違う」と正面から向き合って話をしていたら，とても快適に生活はできない，そんな風に思っていました。そうしたときドイツにいる私の娘にこの話を出しました。すると，「いや，ふつうの友だち同士との話でもそうだ」と言います。娘は中学を卒業すると，ドイツにわたって，そのままドイツ人の中で生活しています。私の場合とちょっと違います。

彼女に言わせると，「日本人と話をするときと，ドイツ人と話をするときとで，自分ははっきり切り替えをする」ということです。つまり，日本人と話をするときには，相手に合わせる，つまり共通点を見つけて会話を進める。一方ドイツ人と話すときには相手との相違点を見つけながら話をするとのことです。これをしないとうまく会話の輪に入れないと言います。

私はドイツ語の教師ですので，すぐにドイツ語教育に結びつけて考えてしまいます。ドイツ語を教えるときに単に単語と文法システムを教えるだけでなく，会話の構造というか，ドイツ人の人間関係，人とのかかわり方も同時に紹介していかないとドイツ語教育にならないのではないか，こんな風に考えるようになりました。

私の専門？

ところで私の「専門分野は何か」ということを聞かれるときがあります。私は「社会言語学」と答えています。これはどんな学問かと言いますと，言語と社会との関係に光を当てる分野です。もともとは社会層の違いによる言語の問題を明らかにし，社会問題の解決を目指して発展した分野です。対象はかなり広いです。

たとえば職業による言葉遣いの研究があります。医者の話し方の特徴，政治家の話しかたなどを調べます。先日，学生とある政治家のインタビューを読みました。動詞を名詞化して 2 格でつなげてゆく表現がやたらに多い。一見高尚に響き，前向きな雰囲気はわかりますが，具体的に何を言っているのかがすぐにはわかりません。具体的な対象を表わす普通名詞を

あまり使いません。学生が訳したあと，「要するに何を言っているのか自分の言葉で言ってごらんなさい」と指示したところ，その学生は「先生，この人が何を言っているのかさっぱりわかりません」と言います。そこで「君の理解は正しい，何を言っているのかがわかるような言葉を話すようでは政治家になれない」と言いました。

女性同士の会話も研究対象になります。女性たちが話しこんでいるところに男性が入ったとき，会話の性格，骨組みがどのように変わるのか。こうしたテーマを会話分析という手法で調べます。

ドイツ人と英語

また「どういう言語が強い言語で，世界言語になるのか」といった問題設定もします。広く使われている言語の特徴，政治や経済と言語の関係などを調べます。現在英語が世界で圧倒的な力を持っています。その要因，またその動向を探ったりします。英語が強いのは，昔からそうだったわけではありません。戦後の現象です。とくに 70 年代，80 年代。アメリカ経済の隆盛とともに英語が急激に頭をもたげました。英語の強さはドイツでも事情は全く同じです。ドイツ語のことを最近では Denglisch と自虐的に言ったりします。要するにドイツ語の Deutsch と英語の Englisch をくっつけた形です。

「お仕事は何ですか」と質問されることがあります。ドイツでは「どこそこに勤めています」というよりは「何をやっている」という職種で答えるのが普通です。ですから私の場合「慶應大学に勤めています」とは言わずに，「Germanist（ドイツ語研究者）です」。あるいは「ドイツ語教師です」と答えます。このように職業を聞かれたときに「facilities manager です」という言い方があるようです。英語です。facilities manager は「施設マネージャー」ということですか。そう言われてもピンときませんので，調べてみると，要は「ビルの管理人」のこと。ブルーの上っ張りを着て，ビルのメンテナンスをしている人たちのことです。ドイツにいるとよく見

かけます。「ビルの管理人」ですと言うよりも，facilities manager と言ったほうがなんとなく響きがよい。言葉には実態を飾るという機能があります。

このようにドイツ語の中にも相当な勢いで英語が入ってきています。「自分たちの言葉が英語に侵食されることをドイツ人はどう思っているのか」，そんな疑問がわきます。

先日，ドイツの国会審議を見ていました。最近はインターネットがあるので，ありがたいです。首相のメルケルさんがまさにインターネット問題を取り上げ，ファイアウォール，つまり不法アクセス防止ソフトの充実について言及しました。その際にファイアウォールをドイツ語にして Schutzwall と言った。一瞬議場が静まりかえりました。その後，弾けるような笑いが議場に起こりました。そこで首相は改めて fire wall と本来の英語に言い換えた。「ドイツ語にしたほうが分りやすいと思ってドイツ語で言った」と議員たちに弁解しました。

おそらくフランスの国会でしたら，議場は別の反応になったかと思います。フランス人は外国語の侵入に非常に敏感で，絶えずフランス語の標準化に努めているようです。ドイツ人はそれほど神経質ではありません。何の抵抗もなく外国語を公の場でも使います。というか，外国語に対して，はなはだ寛大で「自分の考えをきちんと伝えることができれば，どんな言葉でもよろしい」と考えている節があります。それはなぜか。歴史的な理由があるからではないかと思います。

ドイツはヨーロッパの中で後進国として出発し，当時の先進国イタリア，フランスの言葉に押されっぱなしでした。18 世紀にはじまる言語浄化運動，19 世紀にはナショナリズムと結び付いた激しい外来語排斥運動をドイツは経験しています。この運動は「ドイツ言語協会」という組織が中心になりました。この団体は後にナチスのヒトラーにつぶされます。ヒトラーはイメージづくりに外来語を多用しました。ドイツ言語協会はヒトラーが使う外来語に対しても，批判をしてドイツ語化を迫り，結局解散を命じ

られました。いずれにしろ，こうした言語浄化運動によって，じつはドイツ語がかなりいびつなものになります。現在，ドイツではそれを負の遺産と理解しているところがあり，外来語排斥の動きをむしろ排斥すると言った他国では見られない状態が生まれています。

理工学部で働いて

さて，もう一つの偶然についてお話します。それは私が工学部に就職したことであります。結果として私は工学部で働けたことを大変ラッキーであったと考えています。それは，私の育った世界とかなり違う発想をする人たちと一緒に仕事をすることができたからです。文系の人間が理系の世界にいる快適さというものが確かにあります。それを体験することができました。

それでは理系と文系，具体的に何が違うのか。そんなものはないという人もいます。私はあると思います。私は文学部の人たちと一緒にいるとき，自分のやっていること，やろうとしていることと社会との関係を考えることはほとんどありませんでした。自分の関心のあることをする，それを社会がどう思おうが知ったことではない。そんな雰囲気の中で過ごしました。ところが工学部というところは，社会の動きに敏感に反応します。社会の動向に合わせて，内容はそれほど変わらないにもかかわらず，授業科目名を変えたりする。科目そのものの出入りも激しいです。そもそも人事の「共通枠」などという発想は，文学部では生まれようがありません。

理工学部の人と接していて，自分が教えている「ドイツ語」という科目が，社会とどう結びつくのか，これを意識するようになりました。結論から言いますと，今もってこの答えを見いだせません。「ドイツ語なんて大学でいらない」と言われれば，「そうだな」と思うし，「あっても悪くないんじゃないの」と言われると，その人が神様のように見えます。なかなか心が定まりません。理工学部ではドイツ語は選択必修科目です。履修して合格しないと学生は進級も卒業もできません。ドイツ語担当の教員として

は，ありがたい学校にいるなと思います。

外国語を教える意味

以前ですが，教員なりたての若かりし頃です。たどたどしくても外国人と言葉が通じる面白さに感激して，外国語学習の意味を見つけたような気になりました。「外国語は道具として役に立たなければ意味がない」などと口走って，突っ走っていたことがあります。

ところがドイツに行く機会を与えられて出かけたところ，ドイツ語がうまく通じないという強烈な興ざめ体験をしました。自分なりに「読み，書き，話す」といったツールとしてのドイツ語をある程度トレーニングをしてドイツに行ったつもりでしたが，それがうまく通じません。その体験を経て宗旨替えをしました。

それはどういうことかと言いますと，ドイツ人が持っている考え方，価値観。いわば生活文法。これを言葉と一緒に習得しないと，うまく言葉が通じないという体験です。外国語教育の際，それらを言葉と一緒に学んでくれないと言葉を教えたことにならないのではないか。むしろそこに大学という場所で外国語を教える意味，広がりが出てくるのではないかと考えるようになりました。それ以降，授業時間の一部を割いて，小さな生活体験を学生に紹介し，むしろわからない疑問として提示して，考えてもらおうとしてきました。

例を挙げます。例えば「ドイツではアイロンがけが上手にできたのに，なぜ日本ではうまくゆかないのか」といったことです。私はアイロンがけが好きです。人の分まではやりませんが，気分転換になります。やっているうちに技術が上達しますので面白い。ドイツでアイロンは非常によくかかります。ところが日本では皺がなかなか伸びずピシッと行かない。これはなぜか。

要はアイロンの力と言うか，ワット数と関係しているのではないかと思います。日本のアイロンは 1200 ワットです。以前のアイロンに比べてワ

ット数がずいぶん大きくなりました。ところがドイツの家庭用アイロンは2200から2600ワットが一般的です。230ボルト。なぜ，この違いがあるのか。わかりません。

ドイツ人感覚を見る別の例を出します。昔，新しいマンションに引っ越したばかりの時です。子供がまだ小さく，窓の網戸に寄りかかってしまいました。すると網戸がばかっと外れてしまい，さっそく修理を頼まなければならないということがありました。それにドイツ人の妻が真っ向から異議を唱えました。「子供が寄りかかったぐらいで壊れるようなものは欠陥商品である」と言います。困ったなと思いました。ここは日本なんだから日本の感覚に従ってほしいと説明しました。子供が寄りかかるなど想定外である。今はやりの「想定外」という言い方をしたかどうかは忘れました。あとでドイツに行ったときにドイツの家の網戸を確認しました。大人が蹴とばした位では壊れないような構造になっていました。こうした危険に対する「想定外」感覚が日本人とドイツ人とでかなり違います。

ところでこのドイツ人の安全感覚の違いは，先日の原発事故でもはっきりと出ました。原発事故が起きてから，間髪をおかず東京にあったドイツ大使館は関西に移されました。ドイツのニュースを見ていますと，「現場から中継します」と言って，特派員が大阪から原発の現状報告をしていました。東京を中心として3000人ほどのドイツ人が生活していますが，その大半がわずか数日のうちに日本を離れました。それから数ヵ月後，ドイツ政府は原子力発電からの全面撤退を表明しました。日本の原子力発電の関係者が「想定外」の出来事，つまり異常な例外的出来事と判断し，理解を求めたことを，彼らは必ずしもそう判断しなかったのだと思います。

話は少しずれますが，ドイツ人のこの想定外感覚というか，想定内感覚というか，これは芸術の世界にも当てはまるように思います。じつはドイツ映画のつまらなさに私は辟易します。彼らが作る映画の多くは，われわれ日本人の感覚では起こりえないことを，ありうるとして映画にする，われわれから見ると，ときにあまりに頭の中だけの観念的な内容になります。

しかしドイツ人にとっては意外に想定内のこと，起こりうることとして表現しているのではないかと思います。日本の映画評論家がドイツ映画を論じて，「前衛的な作品だ」などと言っていることがありますが，ドイツ人自身は前衛的だとも，アバンギャルドだとも考えていないのではないか，そう思います。

今の言語状況

ところで現在，社会言語学関係の人たちは大変忙しい日々を送っています。言葉に関して歴史上これまでなかったことが起こっているからです。それは何か。

現在，世界中の人が空前の量の文字を書いています。私たちの伝達手段はいろいろあります。しかし文字による伝達がこれほどまでに増大したことは過去の人類の歴史でありません。学校に通う生徒たちが書くといったら，これまでは学校という場で短時間の作業でした。ところがいまこの若者たちが狂ったように書き散らしています。先日うちの高校で問題になった生徒は，毎日平均4，5時間ブログを書き続けていると言います。完全にのめりこんで中毒症状です。自分が何を書いているのかもわからず，心の中のものをすべて吐き出す。一人で書く日記と違って，読者がいるという意識が気分を高揚させるようです。ブログを書いた後，すっきりして学校の勉強を始めるということで，とても成績の良い生徒です。

これは決して例外的なことではなく，世界の傾向のようです。若い人だけでなく，一般の人も同様に，激しく書き込みをしています。ドイツのブログ研究者は，「こうした新しい伝達技術を使って書かれた言葉，とくに若い人たちが書くドイツ語の90％はゴミ」と言います。しかしことばを調べている連中は，ゴミも積もれば山となる。そこからどんな爆発が起こるかもわからないと，まさに毎日ゴミあさりをしています。携帯メールの登場による言語への影響，たとえば多様な省略語など，毎日，おびただしい数の新語・造語・文体が生まれています。それらを整理して毎年いくつ

かの辞書が出版されます。

研究と教育

最後に「研究と教育」についてお話ししたいと思います。大学の教員に求められるのは，研究と教育です。この両方を両立させなければなりません。ところが現実は難しい。私は就職してから教育に軸足を置きました。私が勤め始めた時代，教育は飯の種，論文を書くことが自分の仕事と割り切っていらっしゃる方が，数多くおりました。今はそんな先生はいないでしょうが，研究会があるからと言ってすぐに休講にします。授業には遅れてきて，早々と時間前に終わって研究室にもどられる。誇りを持って，そうしているようなところがありました。私も「これが大学なんだ」と思いましたが，何かしっくりしない部分もありました。私が「教育」に向かう動機に，そうした状態への私なりの反発もあったと思います。それ以外にも，私は学生のころからドイツ語の教育教材の貧しさに憤りのようなものを持っていました。その後，私の先生の手引もあり，教科書の製作をするようになりました。

しっかりした内容の教材を書こうとすると，いろいろ調べざるをえません。教材づくりとの関係で論文を書きました。したがって私の論文はあっちこっちとテーマが飛びます。それで大谷は一体何の研究をしているのかと聞かれることが多くありました。昨年，ドイツ人のお墓のことを書きました。「大谷もついに行くところまで行ったか」と思われた方もいたようです。これは日本人の墓に対する思いの強さを見て，「ドイツ人は墓をどのように考えているのか」といったことに疑問を持ち，教材にしたいと考え，調べた結果です。ドイツ人の価値観の中でも死生観は一つの重要なポイントではないかと考えました。

本で調べましたが，よくわかりません。それでドイツに行きました。葬儀屋を訪ね，費用を含め葬儀の実情を聞き，葬儀をとり行う牧師さんのところに行って「死をめぐるドイツ人の考え方」を聞きました。また葬儀の

雰囲気を知るために，葬儀に参列しました。見ず知らずの方たちの列に並んで墓地まで同行しました。さらに「埋葬文化研究所」があることを聞きつけて，ドイツ中部にあるカッセル市まで出かけました。そこで初めて「埋葬の」という意味の sepulkral というラテン語表現を知りました。娘を私の秘書に仕立てて，日本から研究者がやってきたという格好で，研究所を訪ね，数百年前からの棺桶などを見せていただきました。また墓地に残った人骨の扱い方などを詳しく聞くことができ，その結果を「ドイツ人の弔い感覚」という小論にまとめました。

「なんでそんなことをするのか」。ドイツ語教員だからだと思います。その立場がなければとてもできることではありません。ドイツで取材するときにも「何のためにそんなことを知りたがるのか」と，よく聞かれました。教科書で小さなドイツ語の例文を作るときにも，「文法的に間違っていなければ良い」とするのではなく，「生きたドイツ語」であることにこだわろうとしました。そうすると結構きつい状態になります。こうしたこだわりは，じつは慶應義塾で学んだことであります。またこだわることが許されたのは，慶應義塾で働くことができたからだと思います。

さて，そろそろ時間のようです。まとまらない話をお聞かせしました。

私もこれから晴れて年金生活に入ります。私は若い時期にドイツ文学に接しました。ドイツ文学の中心は Bildungsroman。日本語で「教養小説」と訳されています。要するに「自己形成」小説です。人間には「自分を成長させてゆく責任がある」という考えがその土台になっています。

私はいわば慶應義塾という環境で自己形成をしてきました。今後は何をするかわかりませんが，やはり「自分を育てる」という作業を今後も続けてゆくことになると思います。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

（本稿は 2012 年 1 月 17 日に慶應義塾大学矢上キャンパスで行なった最終講義に基づいている。）